



診察室

ざくばらん

軽率な物言い

年の瀬に反省

正しい情報、時にマイナス

物言えば唇寒し秋の風。口は禍の元だ。禍は報いである。そつだ。正しいことを言っているから、と許されるものでもない。それで傷つくひともいる。

75歳のI子さん。この頃、不眠が続いて、血圧も不安定だ。「新聞で読んだけど、心房細動のひとは認知症になりやすいそうね」と、顔が引きつっている。8年前に、脳梗塞になった。心房細動が原因で血栓ができ、それが脳の血管に飛んだのだ。手足の麻痺は軽く済んだが、脳梗塞の予防のために抗凝固剤をのみ続けている。

心房細動は、加齢とともに増える不整脈の一種だ。根本治療に、不整

脈の元を電流で焼いて心房細動を止める方法がある。カテーテル・アブレーションという。うまくいけば、薬をのまなくて良くなる。もしも、心房細動を治療しなければ、脳を含めた全身の血流が悪くなってくる。

その結果、認知症になりやすくなるということらしい。だが、Iさんのように、心臓の状態によってはアブレーションのできないひともいる。そついつひには、認知症の心配だけが残ってしまう。ひとによっては、知ることにはマイナスにしかないこともあるのだ。

と思いつながら、ワッシーとて、他人のことを言えない。血圧の薬をのまないいと、脳梗塞になるぞ。いきなりの頭痛は、頭のコワイ病気のせいだ。かも。薬のせいだ、脳の血管が細くなることもある、云々。まるで、書きたい放題ではないか。傷ついたひともいるだろう。

確かに、これも医学的には正しいと言える。そして、患者さんのために警鐘を鳴らすのも医者役割かもしれない。だが、思いがけず、その情報に振り回されるひともいる。が、医者はそのままで深くは考えていない。ま、デリカシーが欠けているのだ。で、そのうち、痛い目に遭うのかも。

(石黒修三 いしぐろクリニック

・脳神経外科専門医、金沢市在住、射水市出身)

イラスト・野畑桃花

